



第二十七号

平成二十九年年度号 (10月10日発行)

「挨拶

つつじヶ丘同窓会関西支部

会長 中村 浩

(西高9回生)

平成28年4月より前任の富士昭一会長からこの任を引き継ぎましたことは、前号の「つつじヶ丘だより」でも報告いたしました。それからもう一年以上も経過しました。

ここ数年にわたり会員の減少、高齢化、特に高女卒の会員の総会への出席が困難になりつつあるなど、諸般の事情から、平成25年度、および26年度と2年間に総会が開かれませんでした。一時期は、幹事会の一部にはこの関西支部廃止の意見もありましたが、この2年間の空白を乗り越えて会の規模を縮小してでもこの伝統のある関西支部を存続させることを幹事会で決定いたしました。

2年前の前総会でご賛同を得た大きな変更点は、総会開催は1年毎を改めて2年毎としたことです。また、会員からの年会費は、当分の間、徴収しないことといたしました。これに伴って平成4年制定の「申し合わせ」を改定しました。これは会則に準ずるもので、昨年度の「つつじヶ丘だより」第26号に「申し合わせ事

つつじヶ丘同窓会  
関西支部発行  
連絡先: 06-6852-8274  
E-mail address:  
hiro@osaka.zaq.jp  
URL: http://td.kansai.sakura.ne.jp

項」として囲み記事にして掲載いたしました。なお、関西支部のホームページにも掲載しております。

なお、総会開催を2年毎にしたのに伴い、会員の親睦を計るために年2回程、

幹事会主催の集まりを開くことを計画しております。本年の4月3日に、京都白川・ぎおん たつみ橋付近で「お花見の会」を開きました。

本年度、平成29年度は2年毎の総会開催の年にあたります。総会に続いて懇親会もありますので、会員の皆様にはごぞつて参加をお願い申し上げます。

幻の原稿2編

私の手元に資料として桜井佳子さんが会長に就任された後の昭和63年(1988年)から平成5年発行までの「つつじヶ丘だより」がある。この最後の平成5年の会誌タイトルは「つつじヶ丘だより」ではなく「つつじヶ丘同窓会通信94〜10」となっている。これは平成4年に石原正さんが会長に就任されての初仕事で、石原さんと私が編集後記を書いている。昭和63年度版の第1号には桜井さんの会長就任挨拶が掲載されていて、この部分は平成27年版に複製版として掲載した。この号は明らかに石原さんの編集である。第2号以下、平成4年迄は桜井さんと小林友子さんの編集の様である。平成7年(1995年)本校の創立90周年の行事があり、それに関連した平成8年度掲載予定の原稿が諸般の事情で発行されず、私の手元に保管されていた。これら原稿2編をここに特別寄稿として掲載する。(文責 中村浩)

《特別寄稿 1》  
「つかの間の帰郷」

石原 正 (西高5回生)

10月6日朝、久しぶりにワクワクしてラピートに乗る。この車両は、外観は鉄人28号のようだが、内部は航空機に似せていて、大きな楕円の窓が異次元を感じさせる。町を抜けて橋を渡る。両側に静かな海面を眺めながら、空港島に着く。難波から約30分。

関西空港の最初の印象は、空間がデカイと云うコトだ。伊丹や羽田はもとより、成田とも違うスケールで、既に国外へ出た気分させられる。

出発ロビーでウロウロしていたら、声を掛けられ、よく見ると8回生の栗山さんだった。その夜の同窓会に出席するために、同じ飛行機に乗り合わせた訳だ。サンドウィッチと缶ビールを買って、最後尾の窓側の席に落ち着く。窓から見る空港の景色は、もう外国そのものだ。

風に乗って舞い上がった飛行機は、大阪湾を西へとんで、やがて眼下に神戸の港が見えてきた。機は既に三千メートル上空にあつて、神戸の市街が一望のもとに見渡せる。この高みからでは、震災の傷跡も感じさせない美しい街路を見せている。六甲山を迂回して機は上昇を続け、遠くに京都の町並みが望まれた。都のシンボルの御所と二条城がハッキリと見分けられる。今日は素晴らしい天気だ！と、思っているうちに、ポツン、ポツンと雲が出て来て琵琶湖の半分程が隠され始めた。一万メートルの高みから一目で琵琶湖全体が見下ろせるコトで、ワクワクしてしまう。

秋の日差しを受けて、山麓の影がクッキリと刻まれ、山頂には白いモノが見える。初冠雪に違いない。遙か彼方の雲の上から頭を見せている富士には、まだ雪がなさそうだ。深い緑から赤く変わってゆく山のテッペンに白い絵の具を吹きかけた様にみえて、神秘的とも云える光景が足の下を過ぎてゆく。思わず2本目のビールに手が伸びた。

到着した函館の気温は14度、栗山さんの出迎への車に便乗して市役所へ表敬訪問に出かける。同期の友人で収入役の山那さんの案内で、商工観光部へ挨拶にゆく。山那さんが開口一番「来年の予算に石原さんの函館絵図の製作費を計上して呉れるってか?」。それを聴いた相手の二人は「イヤイヤととてもとても」と、あわてて打ち消す。山那さんが畳みかける。「次の市制80周年に頼んだらどうかね」「イヤイヤ、私はとうに辞めているけど、次の責任者が何と言うか・・・」そこで、私「80周年が2003年だから、とりあえず今世紀には考えられない訳ですネ」「まあ、そうですねエ、後任の者が80周年に依頼するとは限らないし・・・」。何だか押し売りのセールスマンの気分になつてきた。まるで、日本でたった一人の鳥瞰図描きが、函館に生まれたのが、市にとって迷惑なのだと云った具合だ。観光部を退室しながら、もうこの連中には二度と逢うコトはないだろう・・・と思つた。

夕方6時、五島軒本店に入った。来賓受付へ申し出ると、関西支部長の名前がリストにない。10分程待たされて案内された席は、真向かいに伊達先生が着席されている旧職員のテーブルだった。支部関係のところには私の席がなく、出崎さんが座っていた。

会が進行して、来賓の紹介があつて、東京支部の次

に関西支部の私と、副支部長の出崎さんの名前が呼ばれ、起立を求められた。支部の代表として祝辞を述べたのは、東京の新谷さんだった。

この総会の出席者は530名で、五島軒の大広間に入りきれず、若者は別室2部屋に入れられていて、最高齢者は86歳、今年の卒業生から花束の贈呈があつた。

大内元校長の乾杯で宴会が始まり、居心地の悪い旧職員の席から同期のテーブルへ席を変え、アトラクションが始まって、ロックの演奏の後は抽選会。特賞の14インチのテレビを最高に盛りだくさんの景品の抽選も、引き札に名前が記入されているので、進行はスムーズだった。市議の能登谷さん(16回生)の応援団のフリで応援歌が歌われ、最後に2つの校歌斉唱で会の幕は閉じた。

翌7日10時より、湯の川の市民会館で創立90周年記念式典が挙行され、現校長の挨拶を皮切りに、おごそかに式は進められた。歴代の校長や父母会への記念品贈呈や話が続ぎ、校歌が斉唱され、第2部として90周年を振り返るビデオが上映された。ウンと古い高女時代とごく最近の映像が主で、我々西高初期の絵が少なく、もの足りない気がした。

昼からの祝賀会の会場は、隣の体育館で、約半分程のスペースにテーブルが並べられ、壇上近くに来賓の席があり、支部関係者が一つのグループにまとめられていた。

会は会長の挨拶に始まり、寄付金が目標をはるかに超えたことについて、同窓生にお礼が述べられた。各界の偉いさんの話に続き、西高1回生の草刈さんの発声で乾杯があつて、宴会が始まった。料理は前夜と同じ五島軒の仕出しだった。前の席に、元野球部で後にジャイアンツのコーチを勤めた東京支部の渡部さん

がいて、3回生を中心にした甲子園出場の思い出話に花が咲いた。

5回生の集まりで、カラオケで電車に乗る時間が来たので中座し、湯の川の終点に向かう。600の曲目を揃えたカラフルな市電は快調に山へ向かつて走る。十字街で無賃下車して、5回生主流派と別れた。

夜は、反主流派数人と谷地頭の池の端料亭にて昔話で過ごし、大門へ出る。土曜日の夜とて、大門通りは閑散としていた。

8日は日曜日で、この日も快晴ナリ。昼すぎ、実家の裏の郵船浜へ出る。戦争中は米軍の捕虜が手押し車で大豆を陸揚げし、戦後はイカつけ船で賑わい、一時は誰も人通りが無かった海岸通りは、今や観光客で大賑わい。

建築賞をもらったとかの「波止場」と云うレストランが青函フェリーの跡地に建って、観光客に混じつて市内の人たちも群れている。妹の話だと・・・人が多いのは、二十間坂の下の道とこの海岸通り、それと西校の下の道だけで、たしかに、車で通った十字街や銀座通りには人影はなかった。

早いとこ、函館絵図を描かないと、昔の我々の思い出の町が駐車場だけになってしまう戦慄を感じて、午後の便で函館を後にした。

### 《特別寄稿 2》

「中身のない卒業証書」

小林 友子 (高女37回生)

今年もまた終戦記念日が来る。毎年迎えるこの日は、それぞれ異なる感慨をもって過ごして来た。永世平和をうたったこの日も50回を迎え、今年も国内外に大変な事柄が山ほどあり、息づまるような思いで

## 本校と函館稜北高校との再編統合

本年1月初頭に同窓会会報「つつじヶ丘」編集担当の張磨勝廣様から、以下のアンケートを頂いた。

①校名存続について ②同窓会の維持・発展について ③統合に伴って稜北高校同窓会、新設校同窓会、「つつじヶ丘同窓会」の在り方 ④母校に対して抱く思い出、エピソードなど。

関西支部の幹事のうち富士、水島、魚橋、中村から回答があり、取りまとめて本部に転送した。中村以外の3名の方々の回答をここに再掲載する。

### 富士 昭一 (西高3回生)

① 校名について: 1950年(昭和25年)に教育改革として男女共学三年制とし、地域区分として函館市内を普通高校三校と想定し、中部校、東校、西高とした。その後人口増加から北校、稜北高校を設立、五校としたが、人口減から三校にするとの事である。三校設立時と現在では状況はかなり変わってきているが、従前の中部、東、西に戻してそのまま存続させることが歴史的にも当然で在ると考える。校舎もそのままであるならば、なおさらの事。

② および ③ 同窓会の維持発展と今後の在り方: 現在の校舎を使用するとのことであれば、校舎は「つつじヶ丘」に存続する事であり、「つつじヶ丘同窓会」一本でいく事に何の躊躇も不要で、自然な成り行きと考える。それぞれの同窓会が繰越金を持っているので、一本化はかなり難しいようである。東と北の併合ではまだ決着していないと聞いている。

④ 母校に対する思い: 現在の西高は進学校ではないと言われている子供達や御両親が考えているのなら再考を要すると思います。

一般家庭において、子供を大学へ進学させたいと考えている方がかなりの率で多いと思いますが、どうでしょう? 女子も嫁入り条件の一つとも言われています。遺愛校、白百合校もかなりの進学率のようです。これから西校の生徒達をどの方向に教育していくのかかじ取りが難しいと思います。いずれにしてもこれからは世界で活躍し通用する教育を求めていることは必定です。教育委員会にお任せではなく、大いに意見を述べる権利が卒業生にはあると考えますので、ハッキリ物を言う事が必要です。

大学への進学校になる事だけを望むわけではありません。部活もスポーツでは部員の数が多い、チームを形成できない現状である事は聞いております。文化活動でも全国レベルの活動もしている模様との事を聞いています。新しい西高の歴史を築いて頂きたく先生の皆様をお願いしたいものです。

### 水島 勝寿 (西高11回生)

① 校名存続: 稜北校側のご了解がいただければ、イ 函館西(にし)稜北高校 又は ロ 函館西(せい)稜高校 といたしたいと思います。

知名度の高さでは日本トップクラスの超人気バンド「GLAY」4名のうち、タロー・ヒサシの2名を輩出した稜北の方が若い人達にとって高いとは思いますが、歴史の長さや卒業生の多さにより西が校名の先になることをお許し願いたく存じます。(ちなみに、テルは商業、ジローは大谷)

② 同窓会の維持・発展: 徐々に人口が減少し、どこの同窓会も会員が減少する今日、維持・発展のためには3校合同で開催すべきと確信いたします。

③ 統合による同窓会のあり方: (仮名)函館西(にし)稜北高校同窓会の終了後、希望者に抛り2次会に於いて各校の同窓会をもったら良いと思います。

④ 西高、稜北高校の卒業生はそれぞれ母校への思い入れ、愛着があると思われます。新設校卒業生入会は今から5~6年後?のことでしょう。しっかりと彼らを迎い入れる「土台」を作るべきと思われます。

### 魚橋 弘子 (西高20回生)

① 学校名につきましては、「西高」が消えてしまうのは、大変寂しいことだと思っています。できたら、残して欲しいと思います。

② および ③ 同窓会の維持発展につきましては、これからは、なかなか難しいものがあると思います。現状を維持しながら、できることを考えていきたいです。

④ 母校に対しての想いは、あの風景の良さの中に建つ伝統校が自分の出身校だという誇りです。

ある。中でも1月17日の阪神大震災以来、半年に亘ってテレビ報道・新聞紙面を真剣に我が事のように憂い、喜び、怒り、安堵と、心を寄せたことは近ごろにないことだ。

なんとなく続いた表面の平和、豊かさの中で、置き忘れたような「人間の原点」に、人、皆立たされたと考える。そして思う。あの日のことを……。

「昭和20年8月15日」この日を境に灯火管制から解放された。永い永い暗闇の生活に馴染んだ私は、

開け放された家々から見える灯りが無性に嬉しく、いつまでも外に居て家人に笑われた。五十年を経た今日、街には色とりどりのネオンが輝き、空を仰いでも星をみることも覚束なくなっている。

37回生は昭和2・3・4年の不景気のさ中に生まれ、満州事変・支那事変の不穏な世の中に育ち、高女の1年生の時大東亜戦争(第2次世界大戦)を迎えた。2年生からは勤労奉仕の名目で学業の大半を作業にかりだされた。高女の4年間のうち登校したの

は延べ2年ぐらいと思う。卒業式も勤労奉仕の合間を割いて、ようやく集まると聞いた。

その卒業式で、当時の奥村校長先生の式辞を聞いた中に「この卒業証書は、名ばかりの卒業証書です。貴女達は、これから、生涯かけて学び、内容のある卒業証書にしてください。……」何ともいえず悲しく聞いた記憶がある。

「礼!」と号令で行動し、教育勅語を旨との教育を受

平成28年度収支会計報告

自 平成28年4月 1日  
至 平成29年3月31日

収入	金額	支出	金額
平成27年度から28年度への繰越金	158,332	さくらインターネット契約・使用料(初年度)	2,896
同窓会本部からの補助金	30,000	さくらインターネット使用料(H29/4/4-H30/4/4)	1,867
寄付金1件(大久保進也様より)	20,000	会誌印刷・郵送料	
		会誌リソグラフ印刷代	1,340
		会誌A3上質紙 500枚	1,124
		会誌郵送料 定型@82x57	4,674
		会誌郵送料 定型@140x2	280
		会誌郵送料 旧会員宛	410
		本部会報の会員宛再郵送料	4,898
		返信用ハガキ(お花見の会)@52x47	2,444
		通信費 本部および幹事宛など	786
		平成29年度への繰越金	187,613
<b>収入 計</b>	<b>208,332</b>	<b>支出 計</b>	<b>208,332</b>

け(マインドコントロール?)、「欲しがりません!勝つまでは」、「贅沢は敵だ!」、「撃ちて止まん!」等々、戦

争一色の中で大きくなった。

卒業と同時に「助教」という臨時の資格で教壇に立った。(後に集中講習で正式の教諭の免許がとれた。)一学期に教えていた事が、終戦を期として180度異なる授業になる。その矛盾に私自身が消化不良をおこし退職する。

17年間生きてきた心棒が抜け、激動の世の中で戸惑うばかりだった。時流に流されぬよう、取り残されないよう足掻き、何とか溺れず今日に至った。

息つく間もなく、これから迎える実年期(?)は驚異的な速さで高齢化時代になるという。夕映えの輝くような老年期を形作ることは、たのしくもあり、大変なエネルギーを必要とする。

半世紀にわたる激動のなかから得た知識で世界中の推移を、少しでも正確に判断できる力を養い続けたいと考える。

同期の皆様の五十年がどんなものだったか、少し興味を覚える。きつと十人十色の人生と思うが、平和への思い入れは共通項であろう。

奥村校長先生から頂いた生涯学習の課題を背負い五十年。はたして私の卒業証書にはどんな内容が詰ったのか、頼りない限りだが、これからも努力を続けたいと考える。

感謝「寄付

大久保進也様(西高7回生)からご寄付を戴きました。財源の乏しい折り、心から感謝しております。



幹事会主催 お花見の会

平成29年4月3日(月)、京都白川・ぎおん たつみ橋付近でお花見。昼食後、幹事会を開催、平成29年度版「つつじヶ丘だより」の編集方針などを検討した。

《幹事会から》

前号でもお知らせ致しましたように、幹事が中心となり、会の維持のための努力を惜しまない覚悟しております。よろしくお願い申し上げます。幹事のメンバーは昨年度と変わっておりません。詳しくは本誌26号をご覧ください。

編集後記

本号で、幻の原稿、2編を掲載した。これら原稿をお預かりして20年以上も経過している。気になっていた案件であったが、これようやく肩の荷が下りた。これら石原、小林さんお二方の原稿の他に、桜井さんからもお預かりした未刊行原稿が1編ある。これみいずれ機会があれば刊行したいと思っている。なお、皆様からの原稿もお寄せください。(中村 記)

平成29年度の総会開催のお知らせ

日時: 29年11月12日(日) 13時より  
(受付12時30分より)  
会場: がんこ 曾根崎本店 (06-6312-5108)  
お初天神通り  
会費: 7000円

なお、以前の調査で会誌送付および連絡要とされた会員の皆様には、案内状をお送りいたします。